

チェコの古典的文学作品に描かれた「ジプシー」像

佐藤 雪野

1. はじめに

チェコの地に「ジプシー」ⁱが到達したとされる13-14世紀から、外来の「ジプシー」は、既にその地に定着していた人々にとって異質な存在であった。彼らに対する実際の迫害の記録が目立つようになるのは16世紀からであるⁱⁱ。例えば、1538年にチェコ東部のモラヴィア領邦議会は、2週間以内に「ジプシー」を領内から退去させる決定をした。1545年以降、ハプスブルク家の皇帝がチェコ西部のボヘミアにおける放浪行為を禁止する勅令を繰り返し発した。17世紀の三十年戦争後、再び「ジプシー」の流入が多くなり、1697年に皇帝レオポルト1世が、全オーストリアにおいて「ジプシー」を「法の枠外の者」と宣言した。その後も追放・迫害政策は続いた。18世紀になると、ハプスブルクの君主による定住化・同化政策なども見られるものの、ボヘミアにおいては19世紀以降も移動生活をするロマが多かった。

当時のチェコにおいては、18世紀末からの言語・文化的な民族覚醒を経て、19世紀前半にはチェコ国民文学も誕生していた。その中では、この「ジプシー」はどのように描かれていたのであろうか。そこには、当時の官憲と「ジプシー」の関係ばかりではなく民衆と「ジプシー」との関わりや、民衆の持っていた「ジプシー」観が、鮮明な形で現れていることであろう。

このことに関連して、2010年4月にチェコである騒動が持ち上がった。2010年4月14日付『経済新聞 *Hospodářské noviny*』の「ヨゼフ・ラダは人種差別者か？ ロマ団体は牡猫ミケシュが気に入らない Josef Lada rasistou? Romskému sdružení se nelíbí kocour Mikeš」と題するこの騒動に関する記事を要約してみよう。

チェコのロマ団体の「ロマ・リアリティ Roma realita」(ヴァーツラフ・ミコ Václav Miko 代表)、「ロマ抵抗運動 Hnutí romského odporu」、「ロマ・コミュニティ同盟 Aliance romských komunit」、「フューチャー・ロマ Futurum Roma」が、教育省にチェコの国民的画家・作家のヨゼフ・ラダ Josef Lada による児童書『ミケシュ Mikeš (邦題:黒ねこミケシュのぼうけん)』を、教材から除外するように申し入れたⁱⁱⁱ。

ミコによれば、「ジプシー cikán」という言葉自体が問題なのではなく、ジプシーは悪者で、注意すべき存在だと作品で表現しているので、作者ラダは人種差別者といえる。教材からの除外の申し入れが受け入れられない場合、刑事告発も辞さないともミコは述べた。

他のロマ市民団体「ロメア Romea」は、「ロマ・リアリティ」から距離をおいた。ロメアによれば、この申し入れは、ミコと彼に近い立場にある団体による行動で、全ロマ・コミュニティの総意ではない。ラダなどが「ジプシー」という言葉を用いたのは、ロマ自身も、その言葉を使っていた時代のことで、歴史的な中立的な用語である。「ジプシー」という言葉を含む作品の書き換えは今となっては不可能である。しかし、作品の内容は

議論すべきである。

この申し入れに対して、教育省は、教材をいかに使用するかは教師に任されており、教師は物語が描かれた時代のクセノフォビアに言及してこの教材を扱うべきであると述べた。

世論の反応は、ロマが「ラダは人種差別者」、「ミケシュは人種差別者」と言って、「チェコの古典の禁書化を求めている」などと短絡したものであった^{iv}。これを煽るようなメディアの報道とインターネット上の議論も目立った。申し入れ団体以外のロマ団体やロマ知識人は、申し入れが逆に非ロマからのロマ攻撃の原因になることを恐れ、距離をおいた。上述の記事からは、ロマ団体「ロメア」も、世論と同じように、ミコらの要求をとらえていたようである。

結局、2日後には、申し入れを撤回し、ミコは、公的場からの引退を声明した。ロマ関係の著作を発表していた^vミコだが、執筆活動からも引退したかどうかは不明である。

ミコや「ロマ・リアリティ」の活動は以前から過激視されていた。アメリカ合衆国大統領オバマやローマ教皇に、ロマ問題解決を要請する手紙を出し、ロマの外国移住を奨励し、そのための援助金を求めたこともあった。

本稿では、この騒動に関する議論の中で登場した作品について、実際に「ジプシー」がどのように表現されているのかを、検討する。時代的に逆行することになるが、問題の発端となったラダの『ミケシュ』から取り上げる。

2. ヨゼフ・ラダと『ミケシュ』

『ミケシュ』の作者、チェコの画家で作家のヨゼフ・ラダは1887年12月17日、プラハから東へ20kmほどのフルシツェ Hrusice 村で生まれた。父ヨゼフ(1847-1904)は靴屋で、ラダは4人兄弟の末っ子だった。

『ミケシュ』の舞台はこの村であり、主人公の言葉を話す黒猫ミケシュの飼い主はペピーク Pepik という少年で、この名はヨゼフの愛称であり、ヨゼフ・ラダ本人がモデルであろう。猫のミケシュは自分で「靴屋のミケシュ」と名乗っており、『ミケシュ』は、ラダ自身の子供時代をもとにした作品であるとわかる。

ラダは、1902年、プラハで装丁、金箔の修業を始め、チェコの国民的画家アレシュ Mikoláš Aleš などの作品に親しんだ。1904年には、雑誌『五月 Máj』に初めての絵画作品が掲載された。1905年から1906年には、プラハ工芸学校で学び、この頃、後述する『シュヴェイク』の作家、ヤロスラフ・ハシエク Jaroslav Hašek と知り合った。

1911年には、初のカラー版絵本『私のABC *Moje abeceda*』を出版した。第一次世界大戦中から、新聞各紙に挿絵を描くようになる。社会民主党系の『人民の権利 *Právo lidu*』、保守系の『国民新聞 *Národní listy*』、独立系の『人民新聞 *Lidové noviny*』など、新聞の思想傾向は問わなかった。

1923年、ハナ・ブヂェイツカー Hana Budějická と結婚し、著名な芸術団体マーネス SVU Mánes に入会した。1921年から1923年に出版された、ハシエクの国民的小説『善良なる兵士シュヴェイクの運命 *Osudy dobrého vojáka Švejka* (邦題：兵士シュヴェイクの冒険)』の挿絵を描いた。

1925年12月29日、後に画家となる娘のアレナ Alena が誕生した。翌1926年、プラハで最初の個展を開いた。1928年12月18日、2番目の娘エヴァ Eva が誕生し、この年は、ベルリンでも

個展を開いた。

1934年から1936年に、児童書『雄猫ミケシュ *Kocour Mikeš*』4部作を出版した。最近の版では表題から「雄猫」が除かれている。

第二次世界大戦中の1942年10月29日、チェコスロヴァキア解体後のボヘミア＝モラヴィア保護領による検閲で出版禁止処分を受けた。1945年、娘エヴァが死亡した。

1947年、国民芸術家 *národní umělec* の称号を得、画業が国家的に認められた。1948年、児童書『賢いきつねについて *O chytré kmotře lišce* (邦題：きつねものがたり)』を発表した。1951年、妻ハナが死去した。

1957年12月14日、プラハで死去した。死後の1970年から1977年に、アニメーション「牡猫ミケシュと仲間たち」が制作され、テレビ放映された。

『ミケシュ』の中で、「ジプシー」に関連して最も問題になると思われるのは、「ミケシュ、さらわれる *Mikeš ukraden!*」のエピソードである。

おばあさんの壺を割ってしまったミケシュは、そのお詫びと弁償のために家出する。そこで、「ジプシー」に出会う。以下にここで描かれている「ジプシー」の姿を紹介する。チェコ語テキストは2011年の第14版^{vi}を使用、日本語訳は、筆者によるが、小野田澄子訳^{vii}を参照した。

... A tu pojednou v záhybu cesty spatřil na malém pastvisku u lesa vůz přikrytý plachtou. Vypřáhnutý kůň se pásal na pokraji lesa a kolem ohně, který plápolal nedaleko vozu, seděli tři lidé. Dvě ženy vařily v kotlíku večeři a muž pokušoval z krátké dýmky. (str.144)

…そして、ミケシュは、道の曲がり角で、森のそばの小さな牧草地に幌馬車があるのを突然見つけた。馬車から放たれた一頭の馬が、森のはずれで草を食み、馬車の近くで燃えているたき火の回りに、三人が座っていた。二人の女性が、なべで夕食を調理し、男性は、短いパイプを吸っていた。

Mikešovi se ti lidé líbili. Muž měl na sobě modrý kabát, červené kalhoty, vysoké lesklé boty a zelenou vestu, plnou velikých stříbrných knoflíků. I ženy měly na sobě i ve vlasech mnoho stříbrných ozdob. (str.144)

ミケシュは、この人達を気に入った。男性は、青いコート、赤いズボン、ピカピカの背の高いブーツ、大きな銀ボタンのたくさんついた緑のベストを身に着けていた。そして女性達も服や髪にたくさんの銀の飾りをつけていた。

Teprve nyní černý muž něco k ženám rozčileně promluvil, ale Mikeš mu nerozuměl, protože mluvil nějakou cizí řečí. Také obě ženy byly velmi rozčileny a ustrašeny. Něco mezi sebou brebentili a potom muž odešel k vozu. Jedna z žen udělala vedle sebe místo a zvala Mikeše, aby si sedl k ohni a ohřál se. Povídala, že mu nocleh dají s radostí a o kousek masa že u nich také není nouze. (str.144-145)

ようやく今になって、黒い男性が女性達に、興奮して何かを話し出したが、ミケシュには、彼のいうことがわからなかった。何か耳慣れない言葉を話していたからだ。二人の女性もとても興奮し、おびえていた。お互いに何かを話し、その後、男性は馬車の方へ去った。女性の一人が、自分の横にミケシュの場所を作り、火のそばに座って暖まるようにと、ミケシュを招いた。ミケ

シュを喜んで泊めること、彼らのところに肉もたくさんあることを話した。

ところが、これらの人々の親切に喜んだのもつかの間、ミケシュは、男性により袋をかぶせられ、馬車にほうりこまれてしまった。

Milé děti, ti lidé byli cikáni! (str.145)

みなさん、この人達は、ジプシーだった！

その後、ミケシュは通りかかった憲兵により救出される。

ここで、描かれている「ジプシー」像は、馬車で移動して野営している移動生活者であり、はだの色は黒く、独特な服装をして、わからない言葉話す人々で、子供をさらうような悪人である。「ジプシー」が子供をさらうという偏見は、戦間期のスロヴァキアなどでも一般的だったようだが^{viii}、ここにもその偏見が表れている。また、「ジプシー」の姿かたちや生活習慣もステレオ・タイプのなものである。『ミケシュ』が書かれたのは1930年代だが、19世紀末のラダの子供時代の体験をふまえての描写の可能性が強い。どちらの時代にもボヘミアには移動生活をするロマが多かった。移動生活するロマが見られなくなったのは、第二次世界大戦期のナチによる迫害を経、戦後社会主義政権下で完全定住化政策がとられてからである。また、戦間期のロマは必ずしも独特な服装をしているわけではなかった。

時代背景を考慮すると、上述のように「ジプシー」が描かれたのは、やむをえなかったともいえるが、このステレオ・タイプの描写とミケシュをかどわかすような「ジプシー＝犯罪者」のエピソードが、現在のロマに対する偏見を助長すると「ロマ・リアリティ」やミコなどは考えたのであろう。学校教材としては、取扱いに注意が必要で、その点で教育省の見解は正しいが、個々の教師が、実際に偏見を解消するような授業ができていかに疑問が残る。差別と偏見に触れずに、単に国語教材として読めば、偏見が再生産される可能性が強い。

上述のように、『ミケシュ』のテレビ・アニメ版が存在するが、1972年に制作され、娘のアレナが制作にかかわっている「ミケシュ、おどかす」編では、このエピソードが、前後のエピソードと一緒に一本の作品にまとめられている。ここでは、ミケシュをさらおうとする男女3人組の姿は、原文通り「ジプシー」風に描かれているが、「ジプシー」という言葉は出てこない。「ジプシー＝犯罪者」とするのは不適切であると、1968年の「プラハの春」頃からのロマの政治的覚醒や、チェコスロヴァキアにおけるロマ研究の始まりから、判断されたのかもしれない。

また、2010年に発行された、CD版の『ミケシュ』には、「ミケシュ、さらわれる」は収録されておらず、問題になる可能性があるエピソードをあえて省略したとも推察される。

3. ヤロスラフ・ハシェクと『シュヴェイク』

上述のようにラダの友人でもあったヤロスラフ・ハシェクは、1883年4月30日、プラハに生まれた。父ヨゼフは、高校教師から銀行員に転じた。ハシェクは、1893年からギムナジウムに通い始めるが、1896年の父の死後、成績が悪化し、98年に退学した。薬局に見習いとして勤めながら、1899年から1902年まで商業学校に通った。在学中、ロシア語を学び、1901年頃から雑誌記事を公表し始める。1902年の卒業後は、スラヴィエ銀行 Banka Slavie に勤めた。

1904年から1907年頃、アナキズムに傾倒する。そのため、1907年には短期間収監された。1910年には、ヤルミラ・マイエロヴァー Jarmila Mayerová と結婚した。

1911年、「法の枠内の中庸進歩党 Strana mírného pokroku v mezích zákona」という風刺政党を結成した^{ix}。1912年、チェコの国民的キャラクターであるシュヴェイクが登場する最初の作品『善良なる兵士シュヴェイクと奇妙な物語 Dobrý voják Švejk a jiné podivné historky』を公表した。

第一次世界大戦で従軍したが、ロシア軍の捕虜になったのち、1916年にはチェコスロヴァキア軍団に入り、更に1918年には赤軍に入った。

1920年にプラハに戻り、『善良なる兵士シュヴェイクの運命』などを発表した。1923年1月3日、リプニツェ・ナド・サーザヴォウ Lipnice nad Sázavou で死去した。

ハシエクと「ジプシー」には余り接点がなさそうだが、1890年代末期から、モラヴィアやスロヴァキアなどを旅行しており、その頃に彼らを目撃した可能性は強い。

『シュヴェイク』には、改宗ユダヤ人ということなのであろうか、本来ありえない存在であろう「ユダヤ人の従軍司祭」が登場するなど、ユダヤ人に関する描写は多いが、「ジプシー」への言及はほとんどない。チェコ語テキストは、1955年版^xを使用、以下の日本語訳は筆者によるが、栗栖継訳^{xi}を参照した。

Taky jsem se tam sešel s několika profesory. Jeden z nich pořád chodil za mnou a vykládal, že kolíbka Cikánů byla v Krkonoších, ... (I-II, str.37)

僕はまたそこで何人かの教授と会った。彼らのうちの一人は、いつも僕の後について歩き、ジプシー発祥の地はクルコノシェ山脈だと説明した…

もちろん、「ジプシー」発祥の地は、チェコ北部のクルコノシェ山脈などであるはずはないが、ここで語られているエピソードの舞台は精神病院であり、「教授」の発言は荒唐無稽なものであるとハシエクは認識している。ハシエク自身が、「ジプシー」の起源の場所をどのようにとらえていたのかわからない。ここでの記述では、「ジプシー」自体が描かれているとはいえ、現代の視点からも、ハシエクの記述は問題にはならないであろう。

4. ボジェナ・ニェムツォヴァーと『おばあさん』

19世紀チェコの国民的作家で、チェコ近代散文の創始者ともいわれるボジェナ・ニェムツォヴァー Božena Němcová は、1820年2月4日、ウィーンで生まれた。出生時の名はバルボラ・ノヴォトナー Barbora Novotná で、両親がまだ結婚していなかったため、母の姓を名乗った。その年のうちに、両親が結婚したため、ニェムツォヴァーも父の姓パンクロヴァー Panklová に改姓した。父は御者、母は小間使だった。1821年、一家はボヘミア東部のラチボジツェ Ratibořice に移り、そこに母の母である「おばあさん」も同居した。この人物が、ニェムツォヴァーの代表作『おばあさん *Babička*』のモデルである。

ニェムツォヴァーは、1826年から1833年まで、就学したが、学校教育はこの基礎的なものしか受けていない。1837年にニェムツォヴァーは17歳で、チェコ民族主義者である税務官のヨゼフ・ニェメツ Josef Němec (1805-1879) と結婚し、4人の子（息子3人、娘1人）をなしたが、結婚生活は不幸だった。職業柄、ニェメツは転勤が多く、ニェムツォヴァーはプラハでチェコ語の作品

を書き始めた。

1855年、『おばあさん』を発表した。1862年1月21日、プラハで死去した。

以下は、『おばあさん』で「ジプシー」が描かれている場面である。チェコ語テキストは、2007年版^{xii}を使用、日本語訳は、筆者によるが、栗栖継訳^{xiii}を参照した。

Také dráteníka i žida přivítala vždy s laskavou upřímností; byli to vždy ti samí a tudy známí již, jako by sprátení byli s Proškovíc rodinou. Jen když jednou do roka se přihodilo, že se toulaví cikáni v sadu ukázali, tu se babička ulekla. Honem vynesla jim jíst ven a říkala: „S užitkem bývá, vyprovodí-li je člověk až na rozcestí.“ (str.32)

(おばあさんは、) 鋳掛屋とユダヤ人もいつも快く迎えた。やってくるのはいつも同じ人で、プロシエク家の人々と家族同然のつきあいをするほどよく知っていた。しかし、年に一度、果樹園に放浪しているジプシーが姿を見せると、おばあさんはおびえた。すぐに彼らに外で食べるものを運んできて、言った。「いいかい、曲がり角まで送っていきなさい」

ここで描かれている、「ジプシー」は移動生活者であり、ユダヤ人や他の行商人などとは違って、恐れられ付き合い合わない存在である。他の行商人などは毎年来ることで親しくなったが、「ジプシー」はそうではない。「放浪している」と書かれているが、年に一度やってくることから、「ジプシー」も定期的に移動しているようである。ただ、同じ人物が来たかどうかは明記されていない。また、鋳掛屋は「ジプシー」に多い職業であるが、ここでは別個に扱われているので、「ジプシー」ではないらしい。スロヴァキアやモラヴィアに見られる、陶器を針金で補強する職人で、「ジプシー」とはみなされない。ニェムツォヴァーが育った北ボヘミアにもこのような行商人や「ジプシー」が定期的に訪れていたらしい。

5. カレル・ヒネク・マーハ Karel Hynek Mácha と『ジプシー *Cikáni*』

チェコ近代散文の祖であるニェムツォヴァーに対し、近代詩の祖がカレル・ヒネク・マーハである。チェコの代表的ロマン主義詩人のマーハは、1810年11月16日、プラハで生まれた。父は粉ひき職人で、母は音楽家の家系である。貧困のため、プラハ市内を転々としたが、マーハは1824年から1830年にギムナジウムで、続けて1830年から1832年にカレル大学哲学部で学んだ。

1830年以後、それまでのドイツ語での詩作をやめ、チェコ語での詩作を始めた。1832年から1836年には、カレル大学法学部で学ぶと同時に、役者として舞台にも立った。

1835年、唯一の完成した中編小説『ジプシー』を書くが、検閲が通らず、生前の出版は叶わなかった。1836年5月、生前出版された唯一の作品で、チェコで最も著名な詩である『五月 *Máj*』を発表した。同年9月、法律事務所での職を得て、リトムニェジツェ Litoměřice に転居した。同年10月、11月に結婚を控えた婚約者のエレオノラ (ロリ)・シヨンコヴァー Eleonora (Lori) Šomková が息子のルドヴィーク Ludovík を産んだ。しかし、マーハはリトムニェジツェで火災の消火活動をして、病を得、11月6日に死去してしまった。

『ジプシー』は、表題自体の「ジプシー」という語が問題視される可能性もある作品であるが、実際にはどのような作品なのであろうか。

作品の舞台は、明記されていないが、ボヘミアのココシーン Kokořín 城とその周辺と推定され

ている。登場人物は以下の通りである。

老ユダヤ人	城のふもとの居酒屋「ユダヤ人の庭」主人。
レア Lea	その娘。
バルタ (バルトロムニエイ)・フラコニユ Barta (Bartroměj) Flakoň	毎夜居酒屋に来る客で、城で働いている。
若い「ジプシー」	レアに一目ぼれする。
年配の「ジプシー」	かつてはヴェネツィアのゴンドラ乗りジャコモ Giacomo。若いジプシーは彼を「父」と慕うが血縁関係はない。
アンゲリナ Angelina	居酒屋の前の主人。今は狂った物乞い。後に、実は若い「ジプシー」の母親であると判明する。
ボレク伯ヴァルデマル・ロムニツキー Valdemar Lomnický hrabě z Borku	城主。バルタの主人。実はアンゲリナとの間のご落胤が若い「ジプシー」であると後に判明する。

あらすじは以下のとおりである。

I 舞台となる地域の風景が描写される。岩山がいくつもあり、そのふもとに小屋がいくつかある。かつては大きな湖があったが、今は小さな池が残るだけで、そこから小川が流れている。谷の中央には岩山があり、その上に古城がある。城の下に小さな貧しげな小屋がある。小さな庭があり、この小屋がこの地域唯一の居酒屋兼宿屋である。

居酒屋の主人は、70歳の背の高いユダヤ人で、美しい娘レアと住んでいる。毎晩、退役兵が客としてやってくる。彼、バルタ・フラコニユは自分が参戦した対仏戦争（ナポレオン戦争か？）の話を一人語り続ける。

II 外の谷で悲しい曲が聞こえる。それに続く歌を聴き、レアは悲しい自民族の歌を歌う。丘の上から谷へと2人の人物がやってくる。2人は「ジプシー」である。若い「ジプシー」が「ここは居酒屋か？」と問い、主人ではなくバルタが2人を小屋に招き入れる。若い「ジプシー」は、バルタがこの地をよく知っているか尋ね、彼は17年前に城主と一緒にここに来てからずっとここにいることを告げる。若い「ジプシー」は、昔彼が4歳くらいの子供の頃、父親とプラハに行く途中でこの宿屋に泊ったが、その当時は、主人が女性だったと言う。バルタはその女性について語る。バルタが城主と当地に来た時に、その女性と出会い、城主と女性は以前から関わり合いがあったようだが、バルタはライン Rejn (ライン?) の戦いで城主と一緒にになったため、その過去のことは知らなかった。女性には4歳の息子がいたが、女性も息子もすぐにいなくなった。その後、かつて城主がネターリエ Netálie (イタリア?) から戻ってきた頃、どこからか現れた女性をアンゲリナと名付け、居酒屋を与え、そこに通って、子をなしたが、女性と息子はすぐに死んだという話をバルタは聞いていた。城の鐘が鳴り、バルタは話を切り上げ、城に戻る。

III 「ジプシー」はナジ・イダイ Nagy-Idai の歌を歌う。(ナジ・イダイについてマーハが注をつ

けているが、16世紀ハンガリーのジプシー物語である。)若い「ジプシー」に恋したレアは、涙を流しながら彼の歌を聴く。「ジプシー」達は出立し、若い「ジプシー」が知っていた洞穴で野営する。年配の「ジプシー」はジャコモと呼ばれる。どこからか人の声がする。

IV パールタは城の門限に遅れ、閉め出される。そこで、城主ボレク伯ヴァルデマル・ロムニツキーが、アンゲリナ、エマ Emma、イトカ Jitka、レアといった女性の名を口にするのを聞く。パールタは、エマというのは城に肖像画のかかっていた婦人(伯爵の正妻か?)であることを思い出す。「ジプシー」は、近づいてきた人の声が物乞いの狂女のものであることを知り、若い「ジプシー」は、居酒屋から持ってきたパンを与える。

V 翌日、レアは若い「ジプシー」に当地に留まるように乞う。昨日のうちに若い「ジプシー」もレアに恋し、別れがたく思う。年配の「ジプシー」は、若い「ジプシー」を残して一人で立ち去ろうとするが、それを若い「ジプシー」が思いとどまらせる。

VI 若い「ジプシー」はレアや老ユダヤ人に愛された。年配の「ジプシー」は彼らから距離をとった。しかし、次第に若い「ジプシー」はレアと伯爵の仲を疑うようになる。

VII 絶望したレアは死を選ぶ。パールタは、アンゲリナがレアを伯爵に会わせたことを話す。年配の「ジプシー」はアンゲリナがかつての自分の恋人であること、若い「ジプシー」は彼女が自分の母親であることに気づく。

VIII 老ユダヤ人は自分の娘を売ったと悔い、身を投げる。伯爵は隣町から帰宅する途中で殺害される。

IX 若い「ジプシー」(伯爵の息子のヴァルデマル・ジュニア)は、伯爵の死体の横に立っており、伯爵殺害の疑いをかけられる。

X 伯爵は遺書を残しており、一堂に会した役人がその内容を確認した。それによれば、アンゲリナの産んだ子がすぐ亡くなったため、伯爵は自分と亡くなった正妻エマの子を、アンゲリナに自分の子の代わりとして渡したという。伯爵はその子に全財産を遺した。皆は若い「ジプシー」に、伯爵を殺したのかと尋ねるが、彼は黙り続けた。

XI 判事らは、狂ったアンゲリナを見つける。居酒屋「ユダヤ人の庭」には親子二人の遺体が置かれている。森で年配の「ジプシー」が発見され、捕えられる。

XII アンゲリナは、若い「ジプシー」を自分の息子だと主張する。若い「ジプシー」もそれを認め、森に取り残されて、「ジプシー」の集団に救われ、年配の「ジプシー」を父として育ったという。若い「ジプシー」は伯爵が書き残した息子の身体的特徴に合致していた。実の父を殺したのかと一同は疑う。年配の「ジプシー」はアンゲリナがかつての自分の恋人だと言い、彼女を奪った伯爵を殺したことを認める。判事らは3日後に年配の「ジプシー」を処刑することを決める。

XIII 若い「ジプシー」は無罪となり、伯爵を継いだ。

XIV 年配の「ジプシー」が処刑前に若い「ジプシー」に残した遺書には、自分は生まれながらの「ジプシー」ではなく、ヴェネツィア出身の「イタリア人」であること、ゴンドラ乗りをしていて、恋人がいたが、その恋人が外国人と共に去り、行方を捜していたことが書かれていた。

XV 若いヴァルデマルは、再び「ジプシー」の衣装をまとい、外の世界へと旅立っていく。

まず、確認すべきことは、表題は「ジプシー」であるが、民族的な「ジプシー」は登場していないことである。「ジプシー」とされているうちの一人、年配の「ジプシー」は、ヴェネツィア人で、もう一人の若い「ジプシー」の出自は、父はボヘミア人、母はアンゲリナならヴェネツィア人、エマならボヘミア人の可能性がある。

「ジプシー」というのは、彼ら自身の生活様式からの自称・他称になる。服装は、「ジプシー」独特のものとして描写される。一つ所にとどまらず、自由に生きるというロマンチックな「ジプシー像」が描かれ、その生き方に対するマーハの見方は好意的である。また、「ユダヤ人」と「ジプシー」という多数派社会から疎外されている人々を主要な登場人物として取り上げ、両者とも、「故郷喪失者」として共通な哀しみをおっている存在として描くことから、マーハの少数者への共感を汲みとることができる。

その意味で、この作品は、必ずしも「ジプシー」に対して差別的なものとはいえないが、現代の視点からは余りにステレオ・タイプの描かれ方をしているといえるだろう。

具体的な描写を見てみよう。チェコ語テキストは、プラハ市立図書館の電子版^{xiv}を用いた。日本語訳は、筆者による。まず、IIの「ジプシー」登場の場面である。

Byli to dva cikáni. Napřed šel malý, po maďarsku vystrojený chlapík; červené, vyšívané spodky, žluté botky a modrá, žlutými šňůrami ozdobená kazajka byly oděv jeho. Na hlavě neměl ničeho, dlouhé však a husté černé vlasy dostačily hlavu před všelikými nehodami povětrnosti uchrániti. Postava jeho byla nepatrná, malá; hlava, jakož i on celý, k pravé straně se nachýlela. Jeho pravá ruka byla o poznání delší nežli levá, a ze zvyku nosil obličej ustavičně do země obrácený; leč obličej jeho byl krásný, obzvláště vysoké, hrdě sklenuté čelo a temnomodré oko, jehožto smutné časem zplanutí nevolně k soucítosti budilo. Druhý cikán, mnoho starší, byl celý modře a méně skvostně oblečen. Nad opálenými tvářemi hořely černé oči co dvě hvězdy na večerním nebi. Mladší měl převěšený přes rameno lesknoucími se strunami potažený cymbál; starší nesl pod pažďím hudební nástroj, podobný našim houslím. Byli cestující hudebníci. (str.12-13)

2人のジプシーだ。先を歩くのは、ハンガリー風の服装をした若者だ。刺繍した赤いズボン、黄色い靴、青や黄色の紐で飾られた上着を身にまとっていた。頭には何もかぶっていなかったが、豊かな黒髪が危険から頭を守っていた。体つきは小柄で目立たなかった。体全体も頭も右に傾けていた。明らかに右手は左手より長かった。地面に向かって絶えず首を振るのが癖だった。美しい顔立ちで、高くひいでた額と暗い青い目が彼の悲しい時代を思い起こさせ、同情を生んだ。2番目のジプシーは、ずっと年配で、飾り気の少ない青い服を身にまとっていた。日に焼けた顔の

上で夕空の2つの星のように黒い目が輝いていた。若い方は、弦が輝いているツインバロンを肩にかけている。年配の方は、ヴァイオリンに似た楽器を腕に抱えている。旅の音楽家だ。

次に「ナジ=イダイ」の歌を歌うⅢの場面である。

“Domov žádný – žádný! Vlast mi neznámá!” mluvil mladší dále a pozdvihnuv cymbál svůj i uhodiv ve zvucné jeho struny, hlubokosmutný počal hráti nápev. Starý cikán též po chvíli vzal hudební nástroj svůj a u provázení zvuků cymbálových hrál ten nápev dále.

Hlubokosmutný byl to nápev, jako v tichém žalu lkaly jemné struny cymbálu žalostnou píseň, a co hlasitý pláč zvuků vzdálených nesla se hudba ta krásným oudolím, truchlivou nocí.

Uprostřed hudby počal mladý cikán píseň přednášeti, nezpívaje, nýbrž jen jako by příběh nějaký vypravoval, brzo povýšeným, brzo hlubším hlasem, tu rychleji, tu zdlouhavěji, jakž toho rozměr hudby žádal.

Byla to píseň “Nagy-Idai”. (str.20)

「故郷なんてない — まったくない！祖国なんて関係ない！」と若い方は更に話し、ツインバロンをとりあげ、弦をたたき、深く悲しげなメロディーを奏で始めた。老「ジプシー」は、しばしの後、自分の楽器をとりあげ、ツインバロンの響きに合わせ、メロディーを奏で続けた。

そのメロディーは深く悲しく、静かな哀しみの中で追悼の歌を優しいツインバロンの弦が奏でるかのようだった。遠くの泣き声のように音楽は美しい谷の悲しい夜に響いた。

音楽の途中で、若いジプシーは歌い始めた、歌うというより、音楽が求めるままにただ高くなったり低くなったり、速くなったり遅くなったりする声で出来事を語っているかのようだった。

それが「ナジ=イダイ」の歌であった。

Vでレアは、ユダヤ人という「ジプシー」同様の故郷喪失者として、若い「ジプシー」に次にように呼びかける。

“Zůstaň u nás!” zvolala prosebným hlasem, “zůstaň u nás, i my jsme cizinci v zemi této; stan náš budiž stanem tvým s námi. Můj otec tomu přivoli, ano – on si to přeje. – Zůstaň s námi!” (str.37-38)

「私たちのところにいて！」（レアは）懇願する声で叫んだ。「私たちのところにいて！私たちもここではよそ者なの。私たちの居場所は、私たちと一緒にいるあなたの居場所になるの。お父さんはそれを許したわ。そう — お父さんはそう望んでいるの — 私たちのところにいて！」

その後、レアに説得された若い「ジプシー」が当地に残ろうとするが、年配の「ジプシー」は一人出立しようとする。それを止める若い「ジプシー」の言葉は、レアの言葉に呼応しているが、二人の「ジプシー」の出会いの場を語っている。

“Otče, pamatuješ noc, kdy jsem poprvé přišel k vám? Opuštěné dítě bloudil jsem lesem hustým; z daleka mi zářily ohníčky co hvězdy naděje; já spěchám za nimi. Kolem ohňů sedí sbor neznámých. Kmen to cikánů. Deštěm zchřadlého ty jsi zavínil ve svůj plášť a k svému přijal si mě ohni. Něco nevyslovitelného, jak jsi pravil, vábilo tě ke mně a taktéž i mne k tobě. Ty jsi slíbil, že mne neopustíš, a já – já jsem bez tebe nemohl být. A teď chceš ode mne – teď mne chceš opustit? Zůstaň s námi! –” (str.41)

「父さん、父さんのところに僕が初めて来た時を覚えている？捨て子の僕は深い森で道に迷っ

ていた。遠くに見えたたき火は、希望の星だった。僕は、たき火に向かって急いだ。たき火の周りには知らない人たちがいた。ジプシーだった。雨で凍えていた僕を、父さんは自分のコートでくるみ、自分のたき火のところに來させた。父さんの話したように、何か言葉にしがたいものが父さんを僕のところへ、僕を父さんのところへひきつけた。父さんは僕に、僕を棄てないと約束した。そして僕は—僕は父さんなしに生きていけない。なのに今、父さんは僕から—今、僕を棄てていくの？僕たちのところにいて！—」

これらの表現に改めて注目すると、あらずじでも示したステレオ・タイプのな「ジプシー」像が描かれていることがわかる。つまり、「ジプシー」は、独特な服装をしたロマンディックな移動生活者である。彼らに共感するか反発するかどうかは別に、その描かれ方は、民衆の持つ「ジプシー」像を固定化するだろう。マーハ自身は、二人の非「ジプシー」を受け入れる「ジプシー」集団の寛容性を好意的に描いてもいるのだが。

また、リストのハンガリー狂詩曲や、ブラームスのハンガリー舞曲にみられるようなハンガリーと「ジプシー」の混同もみられる。そして、ツィンバロンやヴァイオリンを演奏する旅音楽家は、典型的な「ジプシー」の職業であり、それがこの作品にも反映されている。

6. おわりに

これらの作品を検討した結果、その作品が差別的なものであるかどうかの問題になるのは、「ジプシー」という言葉が使われているか否かだけではなく、その表現内容であることがわかるであろう。このことは、作品を批判している現代のロマも理解している。古典的文学作品を評価する場合、その時代背景を理解したうえで、現代の視点からも評価することは必要であろう。しかし、現代の視点から問題のある点が存在するからといって、その作品の文学的価値が下がるわけではない。

19世紀から第二次世界大戦前までのチェコの古典的文学作品に描かれた「ジプシー」像は、当時の民衆が接した移動生活者としての「ジプシー」とその独自の風体、及びそれらについての語り伝えを反映したステレオ・タイプのなものである。それは、現代ほど差別の問題に敏感ではない当時の時代背景を示しているのであろう。現代の視点からは問題があると見えるものも多いが、それが当時の人々の一般的な見方であり、当時は問題にならなかったということは知らなければならない。文学作品は時代を見る鏡である。

時代背景を理解せずに、古典的作品を盲目的に読むと、様々な偏見が助長されることもある。特に若年者を対象としている学校教育の場では注意が必要であろう。一方的な見方をせずに、また議論封じをせず、様々な角度から古典を評価しなければならない。その意味で、極端に走りやすいインターネットの議論の危険性を、「ミケシュ事件」は示したともいえるであろう。

注釈

- i 本稿における「ジプシー」とは、中世以来の史料に「ジプシー」と記録されたり、とりあげる文学作品の中で「ジプシー」として描かれたりした人々である。彼らは、必ずしも現代のエスニック・グループとしての「ロマ」と一致しない。
- ii Horváthová, Jana, *Kapitoly z dějin Romů* (ロマの歴史諸章), Brno, 2002, str.20-21.

- iii インターネット上に、ロマ・リアリティの要望書の画像が上げられている。<http://www.flickr.com/photos/fuxoft/4519903449/> (最終アクセス日: 2012年10月31日)
- iv チェコの週刊誌『週 Týden』電子版のスヴォボドヴァー Ivana Svobodaによる記事「一部のロマには雄猫ミケシュが気に入らない。ラダは人種差別者ということだ Části Romů se nelíbí kocour Mikeš. Lada prý byl rasista」に寄せられたコメントなどを参照。記事は印刷版にも掲載された。http://www.tyden.cz/rubriky/domaci/rasismus-v-cesku/romum-se-nelibi-kocour-mikes-lada-pry-byl-rasista_165465.html (最終アクセス日: 2012年10月31日)
- v *Anti-Cikanismus* (反ジプシー主義), [České Budějovice], 2009.
Skvrna Evropy (ヨーロッパの汚点), Brno, 2009.
Sto romských osobností, (100人のロマ伝) [České Budějovice], 2009.
Česko-romské vztahy (チェコ=ロマ関係), Brno, 2010.
- vi Lada, Josef, *Mikeš*, Praha, 2011¹⁴.
- vii ヨゼフ・ラダ、小野田澄子訳『黒ねこミケシュのぼうけん』岩波書店、1967年。
- viii Lacková, Elena, *Narodila jsem se pod šťastnou hvězdou* (幸せの星のもとに生まれた私), Praha, 1997.
- ix Hašek, Jaroslav, *Politické a sociální dějiny Strany mírného pokroku v mezích zákona* (法の枠内の中庸進歩党政治・社会史), Praha, 1963. 邦訳: ヤロスラフ・ハシェク、栗栖継訳『プラハ冗談党レポート: 法の枠内における穏健なる進歩の党の政治的・社会的歴史』トランスビュー、2012年。
- x Hašek, Jaroslav, *Osudy dobrého vojáka Švejka*, I-II, III-IV, Praha, 1955.
- xi ヤロスラフ・ハシェク、栗栖継訳『兵士シュヴェイクの冒険』筑摩書房、1968年。
- xii Němcová, Božena, *Babička*, Praha, 2007.
- xiii ボジェナ・ニェムツォヴァー、栗栖継訳『おばあさん』岩波書店、1971年。
- xiv <http://web2.mlp.cz/koweb/00/03/42/59/03/cikani.pdf> (最終アクセス日: 2012年10月31日) 1906年版がもとになっている。